

【国】新学習指導要領 [社会に開かれた教育課程]
 「何ができるようになるか」/「何を学ぶか」/
 「どのように学ぶか」
 ・資質・能力の育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」
 ・カリキュラムマネジメントの充実
 ・児童生徒の発達の支援、家庭や地域との連携・協働

【県】第4次岐阜県教育振興基本計画 [2024-2028年度]
 ○「未来をつくる確かな学力と実践力」の育成(施策Ⅱ)
 ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」との一体的な充実による「主体的・対話的で深い学び」の実現
 ・資質・能力の育成に生かす学習評価の充実
 ・横断的・総合的な学習の推進

【西濃教育事務所】令和7年度の目標
志と感動を育む西濃の教育の具現
 —「自立」「共生」「自己実現」する児童生徒を—

令和7年度の理科指導に当たって(県共通)

- 基本的な構え ■ 資質・能力の育成するために必要性のある効果的な ICT 機器の活用、及び「指導と評価の一体化」のための学習評価を実施する。
- 指導の重点 ■ ①問題解決の活動・科学的に探究する学習の充実(※)
 ②理科を学ぶことの意義や有用性の実感
 ※一連の問題解決・探究の過程を、即座に検討改善しながら、自ら推進していく児童生徒を目指す。

	指導計画	指導方法	学習者、学習集団育成
現状	<ul style="list-style-type: none"> ○単元の導入で既習事項や認識とのずれを感じさせるような事象提示、具体物等を利用した導入が行われていて、子どもたちにとって学びたいと思える環境が生み出されていた。 ○授業の終末に次時やこれからの学習につながる「新たな問い」「疑問」を生み出すように考えられていた。 ●単元を通して、どのような資質・能力を育てていくのかが明確になっていない。単位時間においてどんな実験を行って何が分かるようになるのかだけが目的になっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○仮説を立て、見通しをもって実験を行っているため、学習支援ツールを活用し、自分の考えを表現したり、仲間の考えを共有したりする活動に自然とつづっていた。 ○共有ファイルに実験結果を入力することで、お互いの結果を共有して、再実験など行っていたり、考察する時に利用したりしていた。 ●ICT で数値を自動的に処理してしまっていたために、子ども自身で実験結果に戻って振り返ることができなくなっていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○実験方法の見通しだけでなく、どのような結果になるのかの見通しをもって実験に臨むことで、実験結果をもとに、自分たちで考察することができていた。 ○終末に学習内容と日常、社会とのつながりを考えられるような場が設定されていた。 ●ひたすら教師が説明して、子どもたちはその指示に従って進んでいる。そのため、実験結果を見ても予想とつなげて妥当な結果なのか考えることなく、記録して終わっていた。
指導の方向	<ul style="list-style-type: none"> □改めて、深い教材研究による教材理解と教材観の明確化を促す。また、本時や本単元の内容が、他教科等のどの内容とどのようにつながるかを把握する。 □個及び学級集団の客観的な実態把握と、それに基づいた指導の内容と方法を計画する。 	<ul style="list-style-type: none"> □自分の考えの妥当性を検討し、必要に応じて改善できるようにする指導と評価。 □一人一人の学びを深めるために必要性のある交流活動を行う。 □理科を学ぶことの意義や有用性、自分の学びの深まりを自覚させる場面を意図的につくる。 	<ul style="list-style-type: none"> □見通しをもって学習を進め、その結果何を獲得し、何が分かったかをはっきりさせる、という学び方を身に付けさせる。 □児童生徒が学ぶ内容や学び方を選択できるよう学習環境を整える。 □児童生徒主導の目的が明確な対話活動を促す。 □安全管理、危機回避力の育成。
	「ぎふ、いのちの教育」の充実に向け、理科としては特に「生命」を柱とする領域において、飼育や栽培、観察や実験等の体験を通し、生命に対する畏敬の念や生命を尊重する態度を培うことを重視していく。		
	<ul style="list-style-type: none"> ◇本時(本単元)において育成する資質・能力、働かせる見方・考え方を明確にした上で、ICT 機器の活用の内容や場面、メリット・デメリットを検討して指導計画に位置付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇ネット上のデータや写真・動画を参照したり、実験結果を撮影したり、整理したり、プレゼン資料やレポートを作成したりするなど、まず様々な活用を試みる。その活用について評価し、より効果的な活用方法を見いだす。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇タブレット等の活用のよさを実感させ、目的に合ったタブレットの使い方を学ばせ、学びを補助するツールとしていく。 ◇著作権、情報リテラシーなどの指導にも当たる。